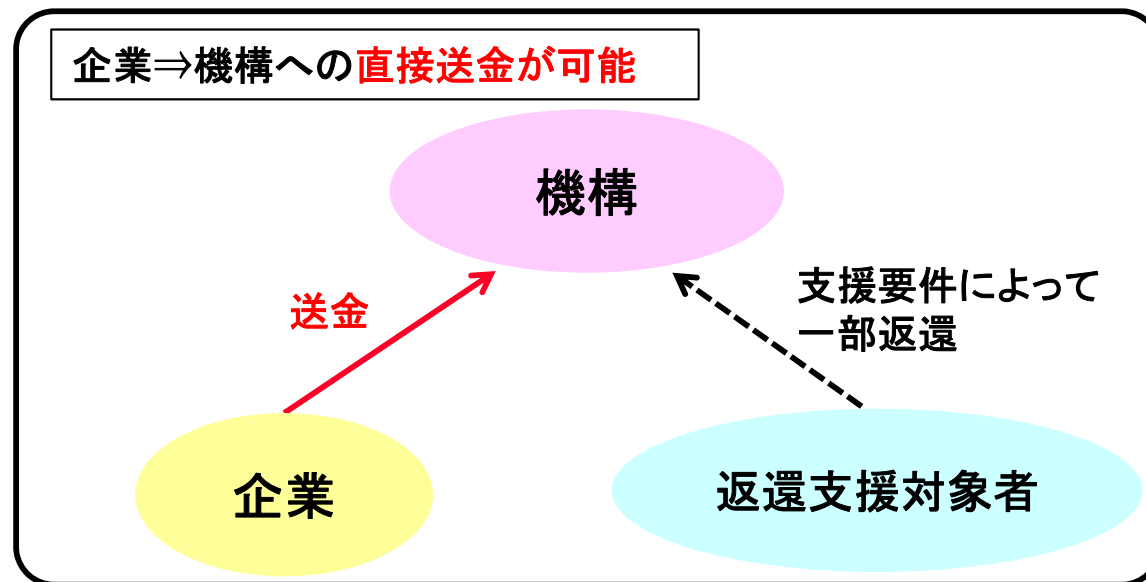


# 企業の奨学金返還支援(代理返還)への対応

日本学生支援機構(以下、「機構」という。)では、将来、各企業の担い手となる奨学金返還者を応援するための取組として、文部科学省と協議のうえ、各企業で実施している奨学金返還支援(代理返還)について、一定の条件の下で直接受け付けることとしています。

## 1. 奨学金返還支援(代理返還)

機構の貸与奨学金(第一種奨学金・第二種奨学金)を受けていた社員に対し、企業が返還残額の一部又は全部を機構に直接送金することにより支援。



2023年12月末時点で全国で1,463社の企業に登録が拡大しており、3,560人に支援を行っています。

※返還支援対象者 = 企業が奨学金の返還を支援する社員

※これから返還支援を実施する企業にも対応します。

# 企業の奨学金返還支援(代理返還)への対応

## 2. 本制度を利用する場合(企業から機構へ直接送金すること)の課税等の関係

### ①【所得税】非課税となり得ます。

返還者にとって、企業が直接機構に送金することで自身の通常の給与と返還額が区分され、かつ奨学金の返還であることが明確となるため、その返還額に係る所得税は非課税となり得ます。

※返還者が役員である場合など一定の場合には、所得税の課税対象となることがあります。

【参考】国税庁HP「質疑応答事例(所得税)」

○奨学金の返済に充てるための給付は「学資に充てるため給付される金品」に該当するか  
(抜粋)

奨学金の返済に充てるための給付は、その①奨学金が学資に充てられており、かつ、その②給付される金品がその奨学金の返済に充てられる限りにおいては、③通常の給与に代えて給付されるなど給与課税を潜脱する目的で給付されるものを除き、これを非課税の学資金と取り扱っても、④課税の適正性、公平性を損なうものではない。

### ②【法人税】給与として損金算入できるほか、「賃上げ促進税制」の対象になり得ます。

企業にとっては、代理返還は使用人の奨学金の返済に充てるための給付にあたるので、給与として損金算入されます。また、「賃上げ促進税制」の対象となる給与等の支給額にも該当することから、一定の要件を満たす場合には、法人税の税額控除の適用を受けることができます。

※賃上げ促進税制:雇用者全体の給与等支給額の増加額の最大30%(中小企業の場合40%)を税額控除\* \*税額控除上限:法人税額又は所得税額の20%

### ③【社会保険料】原則として、標準報酬月額算定のもととなる報酬に含めません。

奨学金返還支援(代理返還)による返還金は、原則として報酬に含めません。

※ただし、給与規程等により給与に代えて奨学金返還を行う場合には、報酬に含みます。

## 3. 本制度を利用される企業に対する機構の対応

本制度の利用企業を当機構のHPに掲載するとともに、大学等に紹介させていただく場合があります。

企業名及び返還支援要件等の情報を当機構HPに掲載するほか、大学等に紹介する場合があります。

※掲載及び紹介することをご了解いただいた企業に限ります。

## 4. 留意点

### ① 代理返還の考え方について

「代理返還」は、民法上の代位弁済とは異なり、企業が使用人に代わって奨学金を返還しても使用人に対してその返還額を求めること(求償権の行使)は想定しておりません。

### ② 企業が本人に返済分を支給する場合の所得税の取り扱いについて

企業が本人に返済分を支給する場合、通常の給与に奨学金返済用の手当が上乗せして支給されるケースが想定されますが、その場合は当該奨学金返済手当が奨学金の返済に充てられるかについては疑義があり、厳密には「学資に充てられた」とみなせず、所得税非課税とするのは難しいと思われます。

### ③ 給与が損金算入されない場合について

役員給与、使用人兼務役員の場合の役員部分の給与は一定のものを除き損金不算入となり、また、過大な使用人給与も損金不算入になります(法人税法34条、36条)。

## 5. 返還支援(代理返還)の具体的な流れ(企業⇒機構)

企業から機構への送金は、機構が提供する「**企業の返還支援(代理返還)システム(以下、スカラKI(ケアイ)という。)**」を利用して行うこととしており、以下の流れで実施しています。

### (1) スカラKIの登録

- ①企業は、返還支援対象者を決定する。
- ②企業は、機構に返還支援申請をする。
- ③機構は、企業に「スカラKI」のID・パスワードを発行する。
- ④企業は、「スカラKI」に企業名、返還支援対象者の氏名、奨学生番号等を登録する。

### (2) 払込用紙での返還

代理返還は、「払込取扱票」で行います。

- ①返還支援対象者は、機構に「奨学金返還証明書」(※)の発行を申請する。
- ②機構は返還支援対象者に「奨学金返還証明書」を発行する。
- ③企業は、「奨学金返還証明書」を確認し、支援額を決定。
- ④企業は、返還支援対象者の支援額を「スカラKI」に入力し、払込取扱票の作成を依頼する。

# 企業の奨学金返還支援(代理返還)への対応

⑤機構は、企業の依頼内容に基づき、返還支援額を記載した「払込取扱票」を送付する。

⑥企業は、機構から送付された「払込取扱票」で返還支援額を機構に送金する。

※「奨学金返還証明書」は、返還支援対象者の返還残額等が確認できます。返還支援対象者は、機構の情報システムである「スカラネット・パーソナル」から当該証明書の発行申請ができます。

※「奨学金返還証明書」は必ずしも必要ではありません。各企業が返還支援するにあたり返還残額等を確認するための書類の一例です。必ず利用しなければならないものではありません。

※返還支援対象者が閲覧可能な「スカラネット・パーソナル」でも返還残額等の確認はできます。

**企業の利便性、安全性の観点から企業の口座より振替可能となるよう、現在準備を進めています。  
(令和6年度中に実施予定)**

## ○ 留意点

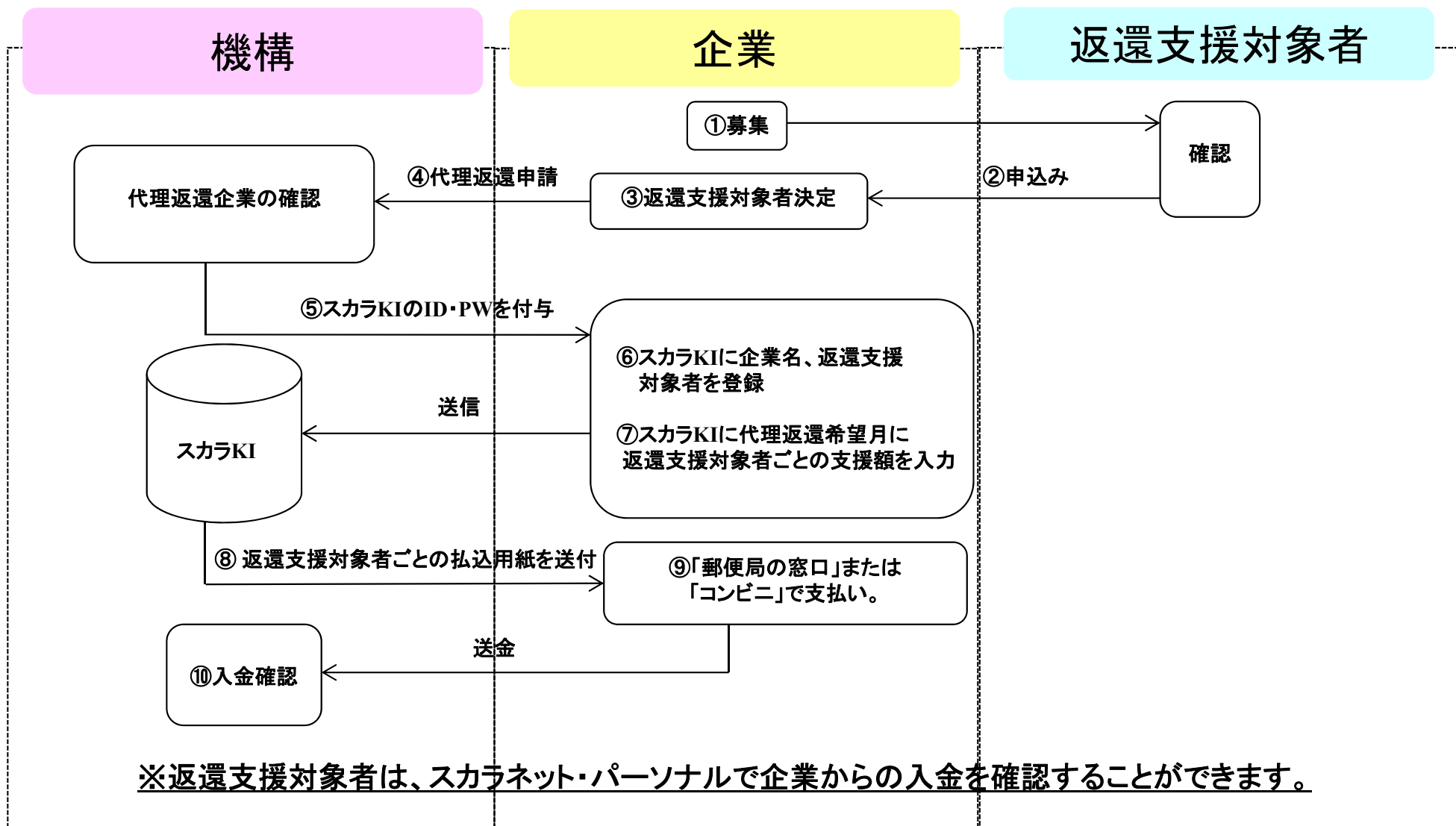
(1)「奨学金返還証明書」は、返還支援対象者からの申請によってのみ発行します。

(2)企業は、機構に対して返還支援対象者の債務を保証するものではありません。よって、企業と返還支援対象者の間に取り交わされた約定の如何に関わらず、返還支援対象者が機構に対し所定の手続きを行うことなく機構への返還が遅延した場合は、通常どおり返還支援対象者本人に対して督促を行うこととなります。

(3)返還支援対象者が、企業の定める返還支援要件に違背した場合でも、機構は一切関知しません。

(4)各企業は、反社会組織等と繋がりがいいこと等を含む覚書の締結が必要です。

# 企業の奨学金返還支援に係るスキーム



企業の利便性、安全性の観点から企業の口座より振替可能となるよう、現在準備を進めています。  
(令和6年度中に実施予定)